



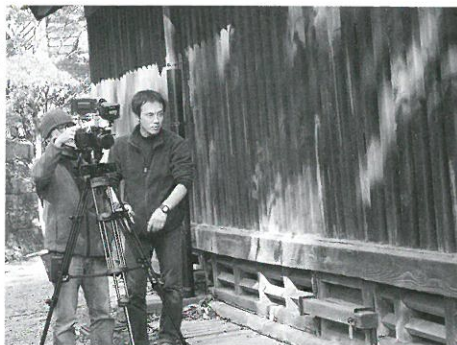
「我が国十何万の精神病者は実にこの病を受けたるの不幸の他に、この国に生まれたるの不幸を重ねるものというべし」という鋭い問題提起を、今から100年前に投げかけた東大の精神科教授の呉秀三——その足跡と実績を描いた記録映画『夜明け前』を監督した今井友樹さんは、1979年生まれ、39歳の若い映像作家です。時代や社会を読み解く流れを緻密に構成する表現力をもっています。

日本映画学校（現・日本映画大学）を卒業し、各地の伝承文化を映像で記録する仕事に携わってきました（最近では、2011年『医（いや）す者として』の撮影を担当）。

今井さんが初めて長編を監督した『鳥の道を越えて』（2014年）は、生まれ故郷の岐阜県東白川村を舞台に、渡り鳥の「カスミ網罟」がおこなわれていた時代にスポットを当て、そこに息づく人間の生き方を浮き上がらせた秀作であり、高い評価を受け、今も自主上映がおこなわれています。祖父の体験談からヒントを得て、自分のルーツとも言える日本の狩猟文化の歴史的な意味を探り出すことに挑戦し、ひとり各地におもむき、調査と撮影を続けた成果です。

プロデューサーである私が、その第1作に注目し、彼に今回の企画を提案したとき、初めて呉秀三の存在を知ったと言います。そこから数多くの資料・文献を読みこなし、研究者

▶映画『夜明け前』のロケの様子
(写真右)



時代や社会を深く 読み解き、表現する

映画監督 **今井友樹** さん

に取材を重ね、作品の枠組みをつくりました。インタビューを進めるなかで、その構成を練り上げては組み直すというしんどい作業（多くのインタビューを重ね、その発言をすべて文字に起こしたものを細かくチェックし、作品に使う部分を一言一句、切り出していくという面倒な作業なのです）を続けて完成にこぎつけました。

2017年の秋には、呉秀三の「報告書」に登場する富山県・大岩不動の「滝修行」の撮影に向いた際、「滝に打たれる人間が必要」ということで、今井さんと私が冷たい水の下に立つということも…。呉秀三がドイツ留学の帰途、精神病者の「家庭看護」の実践を続けていたベルギーのゲールという街に立ち寄り、視察をしていた記録や、ウィーンの大学での講義受講録に残したサイン（署名）を撮影するために、昼間の最高気温がマイナス5度、夜はマイナス10数度にもなる厳寒の2月の撮影も敢行しました。

今井さんは、お酒は飲めるものの、ビール2杯程度ですが、作品について話すと、語り口もソフトにゆたかな知識を披露してくれます。今後、障害者の問題について語れる映像作家として活躍が期待されます。

（映画プロデューサー 中橋真紀人）

いまい ゆうき／2004年に日本映画学校を卒業後、民族文化映像研究所に入所し、調査・演出・制作にかかわる。第1回監督作品に『鳥の道を越えて』（2014年）。2015年に株式会社「工房ギャレット」を設立。2018年に精神医療の先駆者・呉秀三に焦点を当てたドキュメンタリー映画『夜明け前—呉秀三と無名の精神障害者の100年』を発表。